

大槻文彦年譜（洋学に注目して）

東北大学大学院文学研究科言語学研究室 後藤 斉

2017-08-26; 2023-09-07 改訂

西暦(元号) 事跡 注：同年中の記載項目は必ずしも月日順ではない。

1847 (弘化 4) 旧暦 11 月 15 日(冬至、新暦 12 月 22 日)江戸木挽町四丁目(現在の東銀座、歌舞伎座の近く)で生まれ、同所で生育。実名清復、通称復三郎、のちに号、復軒(「復」は冬至の「一陽來復」から)。父は漢学者磐溪(1801-1878. 清崇、平次、愛古堂、晩年は磐翁。「盤」と書くのは誤り)、祖父は蘭学者玄沢(1757-1827. 茂質、磐水)、兄は考証家如電(1845-1931. 修二)。翌年、種痘を受ける。

1851 (嘉永 4) 家学(漢学と詩文)を受ける。

1859 (安政 6) 関研次藍梁(膳所藩儒者)の門に入り、素読筆跡を学ぶ。翌年、水練、馬術を学ぶ。

1861 (万延 2、文久元) 林大学頭の門に入り、漢学修業(名目のみ)。

1862 (文久 2) 9 月洋書調所(開成所)に入り英学・数学を学ぶ。10 月元服。一家で仙台に帰住。

1863 (文久 3) 5 月仙台藩校養賢堂に入り文武の修業(漢学、剣術)、のち諸生主立(助教)に。

1865 (元治 2、慶応元) 「正権論」。「平泉游記」(平泉は 2011 年ユネスコ世界文化遺産登録)。

1866 (慶応 2) 磐溪が隠居し、如電が家督。閏 4 月、洋学稽古人を命じられて養賢堂で瀬脇節蔵(大築拙蔵。のち文彦の妹雪の夫)から蘭学・英学を学ぶ。9 月江戸に出て、10 月開成所に再入学。12 月横浜の横尾東作宅に住み、横尾から紹介されて翌年にかけて米国人 J. H. Ballagh から英学教授。

1867 (慶応 3) 1 月学資を稼ぐため英国人牧師 M. B. Bailey の『万国新聞紙』の編集員(「日本最初の新聞記者」。「大英国史」)。D. Thompson からも英学教授。10 月仙台藩江戸留守居役大童信太夫に従って京都に赴き、情報収集活動。「王政復古に付建言」。

1868 (慶応 4、明治元) 1 月鳥羽伏見の戦いを実見。『慶応卯辰実記』(3 巻. 自筆写本が宮城県図書館蔵)、『復古始末』(のちの写本が国立公文書館蔵)。3 月奥羽鎮撫使に従って仙台に戻るが、4 月藩命で横浜で英学修業、5 月江戸で「藩の探偵」(情報収集のほか銃器弾薬の買入も)。9 月プロシア船を雇い彰義隊残党らと仙台に戻るが、仙台藩は降伏。10 月横浜に逃れ、オランダやプロシアの商館に住まいつつ、再び Thompson の下で英学。

1869 (明治 2) 4 月箕作圭吾らと横浜のプロシア公使館内に起居。E. M. Van Reed と岸田吟香の『横浜新報もしほ草』の翻訳に協力。同月入牢した磐溪のため、仙台に戻って助命活動(翌年元日に出牢)。8 月『日本国誌』訳稿(1860 年米国刊の地理書の抜粋。早稲田大学図書館蔵)。西村傳九郎・岡本文平『北蝦夷地唐太島経歴記』の写本(宮城県図書館蔵)を作る。

1870 (明治 3) 東京に戻り、断髪、箕作秋坪(圭吾の父)宅(浜町津山藩邸内、現日本橋蛸殻町)に起居。大学南校に入り、英学・数学を学ぶ。「久奈志利御場所東西里數并川々所々小名漁場書上」の写本(宮城県図書館蔵)を作る。『北海道風土記』(30 巻)成稿(国立公文書館・宮城県図書館蔵。巻 20 のみ 1997 刊)。

1871 (明治 4) 3 月箕作秋坪の英学私塾三又学舎に入り、9 月幹事(塾長)。アルバイトで「賃訳」。このころから日本文法を志し、国学を独学。「箕作奎五墓誌」を撰文(谷中霊園)。

1872 (明治 5) 6 月 1 日壬申戸籍編成で仙台籍、名を文彦と改名。如電、文部省で『新撰字書』の編集に参加。10 月文部省八等出仕となり、字書取調掛で英和对訳辞書編纂を命じられる。『英和大学辞典』(第 2 巻(AI-AN)の原稿のみ早大図書館蔵)。

1873 (明治 6) 太陽暦に改暦され、磐溪、新元会を開く。『琉球新誌』(1995 複製)、『琉球諸島全図』(2017 複製)刊行。師範学校で教科書の翻訳・編集(『万国史略』(2 巻)翌年刊)、文部省で E. M. Sewell 著などから『羅馬史略』(10 巻)訳述(翌年刊)。宮城師範学校(変遷を経た後、1965 年に東北大学から分離して宮城教育大学)初代校長として仙台に赴任(~1875)。

- 1874(明治7) 「宮城師範学校額面背文」(額面「師範学校」は磐溪書、宮城教育大学蔵)。『日本暗射図』(白地図)刊行(1884『新刻日本暗射図』『同指南譜』)。『^{アフリカ}亞非利加誌』(2巻)訳成(宮城師範学校をへて宮城県図書館蔵)。桜田欽斎『仙台方言』(1818ごろか)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。1995翻刻、2000影印)を作らせる。『史苑^{くわんか}拈華』(2巻6冊)稿本(宮城県図書館蔵)。『樺太島ノ議』を建白(国立公文書館蔵)。^{もろくずのぶずな}諸葛信澄『小学教師必携』に序(翌年刊)。
- 1875(明治8) 2月**文部省報告課勤務となり**、西村茂樹課長から**日本辞書の編輯を命じられる**。明六社定員。『万国史略 皇国部』刊行。4月文憲寮の設置を文部卿に建議(?)。4月現西公園に「**前哲林子平碑**」(磐溪撰文)を建碑。西村・磐溪・阪谷素・那珂道高・榊原吉野・黒川^{まよりの}真頼・小永井八郎・木村正辞らと洋々社を設立し、「擬奉英国女帝書」、「ペルリ日本記行中ノ訳文一節」、「日本文法論」。5月戸主如電が東京府に貫属替、10月に隠居して、文彦が家督相続。榊原と『色図積』を述。
- 1876(明治9) 2月成島柳北に代わり一か月『朝野新聞』論説を担当し、「日本文章論」など。『小笠原島新誌 図附』刊。8月本郷^{きんすけ}金助町(現文京区本郷三丁目)に家を新築。「印刷術の史」、「日本「ジャパン」正訛の弁」、「東洋印刷術の史」、「日本文字変革論」。12月前期文法会第1回(中根^{きよし}淑・那珂道世・横山由清・黒川ら参加。1878年7月まで16回)。
- 1877(明治10) 「日本文典編輯総論」。「**伊達政宗ガ遣欧使ノ記事**」。『支那文典』(2巻。高第丕(T. P. Crawford)・張儒珍共著『文学書官話』(1869)に解説を付した)刊行(1994複製)。「君主ヲ称スル語各国相似タルノ考」。如電『日本洋学年表』(1927年『新撰洋学年表』、1965年佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』)。如電『追遠会誌』(前年の玄沢五十年祭記録)。**富田鉄之助**ら旧藩士と伊達家当主宗基が経ヶ峯瑞鳳殿(現青葉区霊屋下。1931年国宝指定、1945年戦災で焼失。1974年再建、1984年「経ヶ峯伊達家墓所」として仙台市指定史跡)敷地に建てた仙台藩戊辰戦争戦没者の「弔魂碑」(鉄製。2011年東北大学金属材料研究所により修復)の碑文を作る。磐溪著伊藤介一註解『近古史談註解 初篇』を校閲。このころ古書店で本木正栄他編^{アングリア}『**諳厄利亜語林大成**』(1814)を発見し、購入(静嘉堂文庫蔵、1976復刻)。
- 1878(明治11) 「小西湖佳話」(~1881)。6月13日磐溪没。10月後期文法会第1回(1882年4月まで57回)。「広日本文典」を起稿。「竹島松島の記事」。北島卓郎『小学必用仮字問答』を閲。中野豊記編『小学日本暗射図附録読例』を校。
- 1879(明治12) このころ在英の**富田の勧めで渡英を図り、家を売却するが、断念**。伊香保温泉楽山館で湯治し、主人木暮八郎の依頼で『伊香保志』(3巻)を執筆(1882刊、1988-89復刻)。田中芳男と四万、草津温泉にも足を延ばして「上毛温泉遊記」(『復軒雜纂』(1902)所収)。このころ富田・木村^{のぶあき}信卿・佐和正・如電ら仙台人と同求社を興して、如電の校で**林子平『六無齋全書』**(1882)刊行など。「琉球の武備」。
- 1880(明治13) 『**印刷術及石版術**』(文部省『百科全書』(Chambers's Information for the People)の翻訳)の一分冊刊行(1986複製)。『開智要覧』、「北条義時廻船式目」、「徳川氏の出版條例」。**千葉文爾編訳『露国沿革史』**を校正(1884『^{ロシア}露西亜国史』と改題、再刊)。
- 1881(明治14) 同求社を母体に富田らと仙台造士義会を設立し育英事業(1886年第二代会長。1915の解散時までか)。鈴木^{えいじゆん}慧淳・竹中邦香・如電らと白石社を興し、翌年にかけて**新井白石『采覧異言』、『西洋紀聞』**を校訂刊行。三叉学舎旧友会を創立。「磔刑は西洋より入りしといふ説」、「井伊直孝が裂きしといふ伊達政宗が百万石の墨付の現存する事」、「日光男体山に登れる記事」、「蜜蜂熱地に移りて蜜を醸さぬ話」。十文字信介『農学啓蒙』を校。石村貞一編『小学科本 日本略史』(1882刊)に叙。
- 1882(明治15) 「モチキルという活語の活用」。奥日光湯滝の^{こうざんとうぼく}「**晃山湯瀑記**」碑を撰文。『日本小史』(3巻)刊行。井上哲次郎抄訳『倍因氏心理新説』を校訂。磐溪『近古史談』(1854, 1864)を『**刪修近古史談**』(4巻)として改訂、『**刪修近古史談 和文**』で書き下し文に和訳(翌年藤江鶴詳解『**刪修近古史談詳解**』を校閲、1894藤江卓三解『**刪修近古史談詳解**』を訂。1899『**標註刪修近古史談**』、1910『**近古史談原文**』)。

- 集』刊行。1996-2000 翻刻版)。大槻清二注『標注忠経』を校閲。
- 1883(明治 16) 音楽取調掛兼勤(~1885)、里見^{ただし}義・加部^{いずお}厳夫と合議で「あふげば尊し」(2006 年文化庁「親子で歌いつごう 日本の歌百選」)作詞。高崎^{まさかぜ}正風らと「かなのとも」を創立(のち他と合同して「かなのくわい」)。『朝野新聞』等にかな文字論の論説を多数寄稿して、のち「仮名の会の問答」として『復軒雜纂』(1902)に収録。フィース著・土屋政朝訳『^{きんてい}刪訂教育学』を閲。
- 1884(明治 17) 「**外来語原考**」。『言海』の草稿が完成。「日本帝国一統全図」。内藤いよと結婚。磐溪の七回忌、『磐翁年譜』刊行。伊達伯爵家の財産の名義変更に尽力。
- 1885(明治 18) 「三味線志」編纂(1896/1897 刊)。『校正 日本小史』(3 巻. 1963 複製)刊行。『言語篇』(文部省『百科全書』)翻訳(日本初の言語学紹介)版權所有届出(1985 複製) (『官報』740(1885.12.17))。林茂淳『早書き取りの仕方』にはしがき(ひらがな書き)。
- 1886(明治 19) 洋々社解散。3 月 23 日『**言海**』**稿本の再訂が終わり、文部省に提出**(佐藤誠^{じょうじつ}実が『言海』と命名、^{もずめ}物集高見が保管)。第一高等中学校教諭(~1888)、これから手帳を愛用。東京学士会院から『古事類苑』編纂委員(~1887)。富田・松倉^{じゅん}恂らの依頼で「英学校を設立するの趣意書」を起草(同年、半官半民の宮城英学校が新島襄校長で設立、翌年東華学校として清水小路(現若林区五橋)に開校)。
- 1887(明治 20) 宮勇墓誌(青山霊園)を撰文。菅沼貞風『大日本商業史 附平戸貿易志』に跋(1893 刊)。
- 1888(明治 21) 作並^{きよすけ}清亮編『松島勝譜』を校訂。島田三郎『開国始末 井伊掃部頭直弼伝』に評。「てがみのかきかた。」(この前後の大槻旧蔵「かなのくわい文献集」が東北大学図書館蔵)。10 月**自費出版の条件で『言海』稿本が下賜され**、富田、木村信卿、大野^{せいはい}清敬の援助に私財を加えて出版へ。日本文章会(発起人高崎正風、西村茂樹、西周)に参加。
- 1889(明治 22) 5 月 15 日『**日本辞書 言海**』**第 1 冊刊行**。局外居士名義で『中止断行条約改正論』。
- 1890(明治 23) 憲法発布による前年の大赦令を受け、磐溪に大審院検事長名で罪科消滅の証明書。玄沢遺稿『^{ひょうん}金城秘鑑 仙台^{ローマ}黄門遣羅馬使記事』を補綴(解説を付す)。『^{かんふくぞう}語法指南』(1996 複製)刊行。菅復三編『雅俗類編 東京名所指南』を閲。『東京須覧具』^{スラング}起稿(国立国会図書館蔵)。長年求めていた伝土佐光輔筆「葛西清重夫妻肖像」(現一関市博物館蔵)を購入し、姪に作らせた模写を清重旧居館で墓所の南葛飾郡洪江村西光寺(現葛飾区四つ木)に納める。11/12 月、次女と妻、相次いで病没。
- 1891(明治 24) 4 月 22 日『**言海**』**第 4 冊で完結**。6 月 23 日芝の紅葉館で**完成の祝宴**(富田・高崎らの発起で、伊藤博文・勝海舟・榎本武揚・加藤弘之・菊池大麓(箕作秋坪の子)・高田早苗・陸羯南(宮城師範学校での教え子で、大槻離任後に中退)・矢野竜溪・物集・西村・如電らが参加し、西村・加藤・伊藤らが祝辞。福沢諭吉は出席取りやめ)。
- 1892(明治 25) 小栗ふくと再婚。岩手県西磐井郡中里村(現一関市)に転籍。**宮城県尋常中学校**(閉校した東華学校の敷地校舎備品を借用し、生徒を編入。新入生に吉野作造、真山青果(のち中退)ら。のち宮城県立仙台第一中学校、戦後に宮城県仙台第一高等学校) **初代校長**として仙台に赴任(~1895. 倫理の講義も)、**宮城書籍館**(現宮城県図書館)**館長**を兼務(~1897)。岩手で大槻家祖三百年祭(9.4)。1875 年建碑の「前哲林子平碑」を伊勢堂下の龍雲院(現青葉区子平町)の林子平墓(1942 年国指定史跡)わきに移転。林子平先生一百年祭(6.21)に参列、『**林子平先生年譜**』(斎藤竹堂『林子平先生伝』に収録)。『**仙台吟社詩**』第 2 輯に叙。栗原郡鶯沢村(現栗原市)の「清水和兵衛君紀功碑」を撰文(翌年除幕)。伊達家^{しゅうしやく}陸 爵運動に協力して、翌年にかけて請願書草案(一関市博物館蔵)を起草。橋本^{こうしゅう}光秋『国語のはしたて 普通教育初学仮名遣』を校。
- 1893(明治 26) 3 月松倉・大童・作並らと仙台文庫会設立(1896 年、伊達家蔵書等を含む図書館仙台文庫を東三番丁に開設。のち宮城県図書館蔵伊達文庫に)。^{もがさき}茂ヶ崎の大年寺(現太白区門前町。惣門は 1985 年仙台市指定文化財)の「撫松小倉翁遺徳碑」を撰文[依田学海が代作](依頼した歌人小倉長太郎[茗園]は

種痘を普及した撫松小倉三五郎の孫。その子に小倉博(国文学者、郷土史家、二高教授、斎藤報恩会博物館学芸員)・進平(朝鮮語学、京城大・東大言語学教授、『仙台方言音韻考 附浜荻』(1932)も)・強(東北大建築学教授、瑞鳳殿再建の基本設計)らの六兄弟。「中村日向義景の事歴」。12月外記丁(現青葉区)の自宅で「愛古堂所蔵展」開催。文彦・如電の運動で前野良沢に贈正四位(12.23)。

1894(明治27) 第二高等中学文芸部で講演「日本洋学ノ起原」(3.21)。「支倉六右衛門墳墓考」(仙台市北山の光明寺(現青葉区青葉町)に比定)、「陸奥太守義良親王御遺蹟考」。支倉六右衛門祭(7.1)。鈴木省三「支倉六右衛門常長之伝」を閲。松島瑞巖寺境内の「桜所石川先生寄蹟之碑」建碑にあたり賛助人。「三石大綱碑」(?)を撰文(詳細不詳)。伝伊達政宗画「達磨図」を購入(1928年東北遺物展覧会に出品後行方不明、2022年再発見)。教員免許状のない本多浅治郎(のち東北大総長・仙台市名誉市民光太郎の兄。「浅次郎」とする資料は誤り)を教諭申請した件で文部省から譴責(11.7)。

1895(明治28) 「陸奥国桃生城ノ考」(桃生城跡は現石巻市)。桜田贅庵『方言達用抄』(1827)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵)を文伝正興に作らせる。東京へ移住。笠原愷泉画「大日本三景 松嶋真景全図」(保瑞会、1896)に付された磐溪「夢遊松嶋賦」(「夢遊松島賦」)に跋。

1896(明治29) 「陸奥国伊治城ノ考」(伊治城跡は現栗原市、2003年国指定史跡)。仙台市榴ヶ岡(現宮城野区)の榴岡天満宮(2015年国指定名勝「おくのほそ道の風景地」に追加)の「星君恂太郎碑(星恂太郎碑)」を撰文(「仙台」と肩書き。題額は榎本武揚)。

1897(明治30) 『広日本文典』、『広日本文典別記』(いずれも1975複製)、『中等教育日本文典』刊行。『伊達行朝勤王事略』。6月、磐溪二十回忌に如電らと上野の日本美術協会で「愛古堂蔵品展」を開催し(追遠展覧会入場人控簿の写本が早大図書館蔵)、磐溪遺文集『寧静閣集』(4集15冊)を刊行(~1907)。伊達綱村ら編『伊達出自世次考』(仙台文庫会刊)に「伊達出自正統世次考序」(「仙台旧文学」と肩書き)。高等師範学校国語科講師(~1899)。「先代萩実話」。

1898(明治31) 「和蘭字典文典の訳述起原」。7月如電次男茂雄を養子に。10月「一関尋常中学校落成式賀章」(「西磐井郡中里村処士」と肩書き)、『日本文典初歩』刊行。「漢文訓点の弊」。『南部系譜』稿(?)翌年『南部世譜附録』。いずれも斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。伊達家蔵書寄託仙台文庫蔵の匡子『浜荻』(江戸末期か)の写本を文伝正興に作らせる。

1899(明治32) 文学博士(3.27)。海嘯罹災者への寄付により宮城県岩手県から木盃。『松浦玉圃伝』刊行。「支倉六右衛門ニ関スル考証」、「陸前国宮城郡福室村正平親王御碑考」、「陸奥多賀国府所在地考」。6.28~8.23、仙台、一関、盛岡、石巻、涌谷を巡る。南六軒丁(現青葉区片平)の宮城県中学校新校舎(大槻図案、山添喜三郎設計)の落成式で演説(7.20)および学友会で講演「仙台出身の蘭学家」(7.23)。大槻平泉先生五十年祭(7.22)に参列し、遺物展覧会に出展、「大槻平泉先生略伝」。宮城県教育会で講演(7.25)し、「寛文万治年間の伊達家の内訌」。「政宗公勤皇事蹟」。藤秀[下飯坂秀治]編「但木成行論」を校。「高野長英行状逸話」。『松島遊覧の栞』、「Guide to Matsushima」刊行(松島は1923年国指定名勝、1952年特別名勝)。「陸奥国多賀国府所在地考」(多賀城跡は現多賀城市、1922年国指定史跡、1966年特別史跡)。西光寺の葛西清重墓(1952年東京都史跡、1955年旧跡指定)に墓標を建立(「二十三世孫」と肩書き)。宮城県庁構内(旧養賢堂、現議会庁舎前)に「学興繁栄松」碑を建碑。堀田正敦『仙台言葉』(1786以前か)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。1995翻刻、2000影印)を作る。

1900(明治33) 国語調査委員(国語調査会。前島密・上田万年ら)(~1902)。東京市に転籍(4.18)。『日本文法教科書』(2巻)、『伊達行朝勤王事歴』(3巻。序で「仙台旧臣」と肩書き)刊行。「仮名と羅馬字との優劣論」、「掛り結びの間の氏爾乎波の「と」に就て」。「多賀国府考」、「信濃の国府及国分寺」。講演「洋学開祖諸哲の苦学」。「超越山西光寺略縁起」(「旧仙台藩士」と肩書き)。「常陸の霞浦の地変」。加美郡小野田村(現加美町)の「中羽前新道碑(新道開鑿碑)」を撰文。永昌寺(現青葉区新坂町)の「菅文三墓誌」(現

存確認できず)を撰文[依田学海が代作]。

- 1901(明治 34) 根岸倶楽部の立案で『東京下谷 根岸及近傍図』刊行。帝室博物館列品鑑査掛嘱託。「陸奥国遠田郡小田郡沿革考」(天平産金地涌谷説を支持)、「陸奥国古駅路考」、「葛西氏について」、「的の字の誤用」、「文字の誤用」、講演「日本支那同文国ならず」。『伊達政宗南蛮通信事略』刊行(英訳つき)(「仙台」と肩書。1908 再版、1928 英訳を除き附録を付して 3 版)。『修正日本文法教科書』(2 卷)を刊行。開成館編輯所編・大槻校『国語綴字法教科書』を刊行。日暮里村大字金杉(現荒川区東日暮里四丁目)の新宅(雨松軒)に転居(根岸御行の松そば。松は現台東区根岸、1925 年天然記念物指定、大槻没同年の 1928 年夏枯死)。「古屋佐久左衛門君追遠碑」を撰文(1975 年福岡県小郡市に建碑)。三木五百枝・大塚彦太郎編『太平記詳解』に序、高橋紫燕『独眼龍伊達政宗』に序。娘さちに猪苗代兼郁『仙台言葉(仙台方言)』(1720)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。1995 翻刻、2000 影印)を作らせる。
- 1902(明治 35) 『日本文法中教科書』、『復軒雜纂』(玄沢『金城秘韞』を再録)刊行。国語調査委員会主査委員(～1913. 加藤弘之委員長、上田主査委員ら)。「国語改良の話」、「伊達政宗卿夫人田村氏の話」、「伽羅先代萩の話」。下飯坂秀治編『仙台藩戊辰史』を校訂(資料提供も)。『蘭学会盟新元会図』(福井信敏模刻)作製。三木佐助『玉淵叢話』に序。
- 1903(明治 36) 「胡弓と三味線との話」。
- 1904(明治 37) 北原雅長『七年史』下巻に序(「仙台」と肩書き。北原はこの著のため不敬罪で神田警察署に拘留と)。寺崎清賢編『奥州高館沿革志 一名平泉史蹟研究』を校閲(1908 刊)。「国語の発展につきて」、「維新前洋学研究者の苦心談」。
- 1905(明治 38) 『新体日本文法教科書』(4 卷)刊行(参考『新体日本文法教科書』に就きて)、『新体日本文法教科書備考』。「日本方言の分布区域」、「対訳辞書の起原」。桃生郡広淵村(現石巻市)の「陸軍少尉勲六等功五級志村萬吉君墓碑銘」を撰文。「歩兵少尉農学士足立美堅君小伝」(足立美堅『いぬ』(1909)巻末付録)、外崎寛編『玉碎集』に序(1909 刊)。
- 1906(明治 39) 「丙午と火災」、「口語の八衢」、「都々逸論」。牡鹿郡石巻町(現石巻市)海門寺跡の「日露戦役従軍死者昭忠碑」を撰文(文中で「旧藩士」と自称)。下谷区上根岸(現台東区)元三島神社の「日露戦役従軍将卒記功之碑」(現存せず)を撰文。
- 1907(明治 40) 仙台一中校舎(大槻の「記念物」)全焼(1.24)、雨天体操場の棟札のみ現存。8 月伊香保温泉村松旅館に逗留して、主人村松秀茂、その実子東条操(同年秋東大國語科入学、のち方言学者、学習院大教授)とともに大槻撰文「弁天滝記」碑(1899 年木暮八郎が建碑を担当)を見る。「故大槻磐溪の逸事」。『箕作麟祥君伝』刊行(1940, 1967, 1983, 2004 複製)。芳賀剛太郎『誤似明弁 新案漢字典』に序。杉田玄白先生贈位祝賀会(12.22)で講演「杉田玄白先生伝」。秋田県由利郡亀田町(現由利本荘市)天鷲神社の「忠烈碑」を撰文(?)。
- 1908(明治 41) 「松島は地変の陥落に成りしかの考」。贈位先哲祝典大会(2.23)で講演し、帝国教育会編『六大先哲』に「青木昆陽先生に就て」。3 月遠田郡涌谷町黄金山神社(1967 年「黄金山産金遺跡」として国指定史跡)の「日本黄金始出地碑」を撰文。臨時仮名遣調査委員会委員(～同年末)。如電らと「大槻磐溪三十年追遠展覧会」(6.26-28)を上野公園日本美術協会列品館で開催し、如電口授『磐溪事略』に補言。9 月光明寺の「支倉六右衛門紀功碑(支倉六右衛門之碑)」を撰文。山内啓二述・松浦玉圃記『紅療法講演録』に序(?)。水山櫻渥編『一関案内』に序。
- 1909(明治 42) 『伊達騒動実録』(2 卷)刊行(1970 複製)。「伊達騒動に就き世伝の弁妄」、「陸前石巻吉野先帝碑考」(吉野先帝菩提碑は、1975 年「多福院板碑群」として石巻市指定有形文化財)。「宮城県立仙台第一中学校校歌」(前年に現若林区元茶畑に新校舎)。今泉寅四郎『仙台人物史 仙台近古史談』に序、臼田寿恵吉『日本口語法精義』に序。横浜開港史料展覧会に西川如見『四十二国人物図説』、林子平自画

賛『和蘭船図』などを出品。東京帝国大学文科大学史料編纂掛編『歴史科教授用参考掛図 第二輯 林子平』に所蔵の肖像画を提供。

- 1910 (明治 43) 「伊達騒動実話」。「朝鮮と日本とは同文に非ず」。木村信卿墓誌(谷中霊園)、十文字信介墓誌(現文京区海蔵寺)を撰文。館山漸之進『平家音楽史』に序(漸之進の子、館山甲午(仙台一中・一高音楽教師)は1969年平曲の無形文化財保持者)、目黒順蔵『处世之誤 一名誠世痴談』に序(1914刊)、藤原相之助『仙台戊辰史』(1911刊)に序(「仙台旧臣」と肩書き)。大浜六郎『避暑案内』に序。
- 1911 (明治 44) 「多賀城多賀国府遺蹟」(多賀城碑は1998年国指定重要文化財)。「西村茂樹先生の逸話」。3月帝国学士院会員。4月仙台市榴ヶ岡の「北村木村君頌徳碑」を撰文(『北村存稿』1934に再録)。10月目黒不動尊瀧泉寺(現目黒区下目黒)の「昆陽青木先生碑」を撰文(境内の青木昆陽墓は1943年国指定史跡)。「仙台浄瑠璃の考」(1929再録)、「天保二年設立図書館青柳館文庫並青柳文蔵伝」(文庫蔵書は宮城師範学校をへて宮城県図書館・宮城教育大学蔵など)、「です言葉」。森慎一郎『新撰漢文典』に序。宇田川玄随・玄真贈位奉告祭(1.14)、箕作阮甫贈位奉告祭(3.11)で演説。玄沢に贈正四位、東京の贈位祭典に資料出展、仙台の贈位祭(12.10)には如電が出席し資料展示。坪内孝・横田市一編『作文大観』を金沢庄三郎と監修。
- 1912 (明治 45、大正元) 富山房の坂本嘉治馬と『言海』増補契約(5.15)。「根岸御行の松」(1926再刊、1989複製)。『佐藤素拙伝』、『万葉集修身歌』。早大図書館「文明源流表彰展覧会」(5.4-6)に出品し、講演「日本文明之先駆者」。稲村三伯[海上随鷗]百年祭(6.11)に日欧対訳辞書類31点を出展し、如電らと講演、欠けていた『和魯通言比考』を後日古書店で購入。福島県石城郡小名浜町二ツ橋(現いわき市)の「仙台藩戦死者之碑」を撰文。「殉死を論ず」、「君を思ふ民情の変遷」。今泉寅四郎『仙台風藻』を命名、序。浜野知三郎編『新訳漢和大辞典』を監修、序。
- 1913 (大正 2) 妻ふく没(4.20)。宮城県登米郡佐沼町(現登米市)の「貞山公営址碑」を撰文。市川源三と共著で『高等女学読本備考』刊行。「山田孝雄氏の平安朝文法史を読みて」、「仏教語より出たる普通語」、「伊達騒動の真相」。県の依頼で仙台藩の英傑13人(伊達政宗・綱村・重村・堀田正敦・片倉小十郎・支倉常長・林子平・大槻平泉・玄沢ら)を選定。西原柳雨『川柳膝栗毛』に序。『仙台伊達家殉死者録』(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵)。
- 1914 (大正 3) 「論語研究に就いて」、「伊達騒動について」、「八代将軍と蘭学輸入」。桃生郡須江村糠塚(現石巻市)に「大槻但馬守平泰常殞命地」碑(12.3)を、西磐井郡金沢村大槻(現一関市花泉町)に「大槻但馬守平泰常館址」碑(12.4)を建碑撰文(「十世孫」と肩書き)。青葉神社奉賛会の社格昇格・経ヶ峯移転運動に資料提供(青葉神社は2019年国の登録有形文化財)。勅任官待遇。
- 1915 (大正 4) 「吾邦蘭学勃興の原因」、「江戸時代の蘭学」、「辞書編纂の苦心談」、「珍書の複本の必要」。「本書編纂に当りて」(1932『大言海』第1巻)。『奥州宇津峰北畠頭信卿事蹟』(宇津峰は1931年国指定史跡)。作並清亮編『東藩史稿』に序。伊勢斎助編『増補多賀城碑考』(1920刊、「多賀城多賀国府遺蹟」を再録)に序。遠田郡教育会編『伊達安芸公』を校閲。北海道有珠郡伊達村(現伊達市)鹿島神社(伊達神社)の「伊達村開拓紀功碑(伊達村開拓記功碑)」を撰文(のち同市開拓記念館庭園に移設)。仙台育英会創立委員(仙台造士義会を解散し、他2会と合同)。
- 1916 (大正 5) 従七位から正五位に昇位。大槻の立案起草で国語調査委員会編『口語法』、翌年大槻の担任編纂で同『口語法別記』(いずれも1980複製)刊行。高松凌雲墓誌を撰文(谷中霊園)。昌住『新撰字鏡天治本』(898-901ごろ成立、1124写)を山田孝雄と共編、複製。法書会編『袖珍 五体字類』に序。仙台一中同窓会(6.17、吉野作造が発起人総代)出席、次回(12.19)から定例化し大槻の命名で「壬辰日雨会」。
- 1917 (大正 6) 仙台の戊辰戦役殉難者弔魂祭に招かれ、県庁構内武徳殿で講演(10.10)、白河の弔魂祭でも講演(10.14)し、「戊辰の挙兵は尊王の精神より起る」、「仙台藩挙兵の懐旧談」。箕作塾同窓会解散。所蔵

の青木昆陽自筆『和蘭文字略考』を複製、解説。河東田経清『横尾東作翁伝』に序。牡鹿郡石巻町(現石巻市)多福院の「勝又晴敏君遺功碑」を撰文。

1918(大正 7) 仙台市公会堂の肯山[伊達綱村]公二百年祭(7.27)で講演「肯山公御治蹟」(「三百年祭」とする資料は誤り)。岩手県東磐井郡藤沢村(現一関市藤沢町)の「藤崖佐伯君頌徳碑」を撰文。宮城県古川町古川尋常高等小学校(現大崎市立古川第一小学校)前の「細川先生頌徳碑」(三浦吉兵衛・吉野作造共撰、2001年古川市指定有形文化財)に題額。

1919(大正 8) 「著述病 老体の文彦翁訪問客を謝絶 言海の増補に苦心」(『東京朝日』2.9)。亀田次郎『山片蟠桃翁の事蹟』に序。「国語語原考」、「昆陽先生事歴」。

1920(大正 9) 志羅山頼順・菅野弘編『平泉名勝誌』に序。

1921(大正 10) 「瑞鳳殿前の弔魂碑の話」(10.3?)。水島慎次郎編『漢和新辞典』に序。

1922(大正 11) 小野清『天文彙考』(『天文要覧』と合冊)に序(1925刊)。従四位。仙台一中創立三十年記念式(6.6)で講演。殉職(7.7)した小野さつき訓導へ弔慰金 50 円と弔詞(7.15。蔵王町立宮小学校内小野さつき訓導遺徳顕彰館に展示)。仙台叢書刊行会編輯顧問、第 1 巻に序。吉野作造、大槻校訂『西洋紀聞』も参考に「新井白石とヨワン・シローテ」を執筆。学制頒布五十年記念祝典(10.30。於東大)で記念表彰牌。東磐井郡摺沢村(現一関市大東町)の「小原磨溪翁頌徳碑」を撰文。

1923(大正 12) 「学術研究上の注意」(仙台一中学友会『創立三十年記念号』)。吉野は、同号に「大槻先生が明治に於ける語学界の大先覚である点に因み」として「西洋人の日本語研究」を寄稿し、「ドンケル・クルチウス日本文典を主題として」(『中央公論』)でも大槻に言及。大槻平泉『経世体要』(『仙台叢書』2 巻)に解題(1918 づけ執筆、「堂弟」と肩書き)、藤原相之助他編『登米郡史』(1972 複製)に序。一関町桜木(現一関市)に「贈正四位大槻玄沢邸址」碑を建碑。

1924(大正 13) 2 月皇太子成婚にあたり、伊達行朝・綱村・葛西清貞・支倉常長らに贈位、磐溪には贈従五位、6 月仙台市公会堂での贈位記念祭で行朝勤王事歴を講演、小原保固編『贈位八譜』(1925)に「伊達行朝卿事蹟」、「葛西清貞事蹟」、宮城県図書館編『甲子紀元節贈位者伝』(1926)に序および「伊達行朝」、「葛西清貞」。斎藤莊次郎編『贈正四位葛西清貞公伝』に序。壬辰旧雨会の一年遅れの喜寿の宴会(12.10、吉野は欠席)、記念に木彫の胸像(曾村芳郎^{とめ}杜芽作)を贈られる(仙台一高蔵。それをもとにしたブロンズ像が 1969 年除幕され、同校内に展示)。

1925(大正 14) 講書始の講師(「秋津洲^{あきつしま}の起源について」)。勲四等瑞宝章。

1926(大正 15/昭和元) 「金君忠輔^{こん ちゆうすけ}碑」(登米郡石越村(現登米市)の「金君忠輔^{こん ちゆうすけ}碑」は建碑年不詳)。

1927(昭和 2) 菅川九二『岩手県史蹟名勝誌』(1929 刊)に題字。

1928(昭和 3) 2 月 17 日**自宅にて没**。法名、言海院殿松音文彦居士(「松陰」と書く資料もあるが、採らない)。正四位に追陞。現港区高輪の東禅寺(初のイギリス公使館の地、2010 年国指定史跡)の、玄沢・磐溪も眠る一族の墓所(「大槻玄沢埋葬の地」として 1983 年港区指定旧跡)に葬られたが、墓は非公開。『言海』増補はサ行まで成稿(「あ」～「き」の校正刷が東北大学図書館蔵)。『国語と国文学』5 巻 7 号「大槻大矢両博士記念」に年譜、自伝、著書論文目録ほか追悼記事。『宮城県人』4 巻 3 号に追悼記事。

1929(昭和 4) 「仙台城本丸御殿記」(「遺臣」と肩書き。仙台城(現青葉区)は 2003 年国指定史跡)。

1932(昭和 7) 如電(前年に没)・大久保初男^{しんむらいずる}・新村出らにより『大言海』第 1 巻刊行(1937 年、第 5 巻索引で完結)。「大言海」刊行記念祝賀会(11.10。丸の内東京会館、約 500 名参加)。

1934(昭和 9) 仙台市斎藤報恩会館で大槻文彦先生七回忌記念講演会(小倉博「大槻先生の思ひ出」、山田孝雄「国語学史上より見たる大槻先生」(「国語史上…」とする資料は誤り)、遺物展(2.17))。

1938(昭和 13) 『復軒旅日記』(大槻茂雄校訂)刊行。

1943(昭和 18) 如電旧蔵書(洋学関係書 811 部、1876 冊)が静嘉堂文庫に受け入れ(文彦旧蔵書も含む)。

- 1949(昭和 24) 『言海』第 1000 版(紙型焼失のため最終版)。
- 1950(昭和 25) 大槻家から『言海』自筆稿本、『広日本文典・別記』自筆稿本、旧蔵書など 71 点 215 冊が宮城県図書館に寄贈され「大槻文庫」、大槻家蔵関係資料と併せて古川高校と同館で展示会開催。
- 1953(昭和 28) 早大図書館が大槻家旧蔵資料約 80 部 120 点を購入し「大槻文庫」(のち、他資料と併せて「洋学文庫」)、「開国百年記念洋学展覧会」開催。
- 1956(昭和 31) 『新訂 大言海』刊行(1959 年大槻茂雄増補『新言海』、1982 年『新編 大言海』)。
- 1968(昭和 43) 明治百年記念宮城県式典(10.23)で先覚者として大槻が顕彰(ほか、富田・鈴木文治・落合直文・本多光太郎・志賀潔・土井晩翠・吉野・真山青果・阿部次郎ら計 16 名)。
- 1978(昭和 53) 高田宏『言葉の海へ』刊行(新潮社、のち岩波書店、洋泉社、2018 年新潮文庫)され、大佛次郎賞と亀井勝一郎賞を受賞。
- 1980(昭和 55) 山田俊雄編集責任『稿本 日本辞書言海』(宮城県図書館蔵自筆稿本の複製および初版 4 冊本複製と図録)刊行。
- 1982(昭和 57) 一関市役所に「大槻文彦先生の像」(佐藤紘^{ひろゆき}行作)設置。
- 1984(昭和 59) 国鉄一ノ関駅前に「大槻三賢人像」(西村栄一作)設置。
- 1989(昭和 64、平成元) 宮城県図書館で「『言海』刊行 100 年記念 大槻文彦展」、宮城県図書館奉仕課調査相談係編『大槻家関係資料所在目録』。近代語研究会第 67 回大会(上智大学)を「近代日本語と辞書 日本初の近代国語辞書『言海』発刊 100 年記念大会」として開催し、講演、展示など。
- 1991(平成 3) 一関市で「言海」刊行百年記念事業(展示会、シンポジウムなど)。
- 1994(平成 6) 早大図書館蔵「大槻玄沢関係資料」169 点(「芝蘭堂新元会図」、『重訂解体新書』稿本、『江戸ハルマ』写本など)が国の重要文化財に指定され、翌年「おらんだ正月 200 年 大槻玄沢関係資料重要文化財指定記念 早稲田大学図書館所蔵 洋学資料展」(2000 年ライデン大学、ボン大学、早大で蘭学資料展)。
- 1997(平成 9) 一関市博物館が開館し、常設展のコーナーに「文彦と言海」と「玄沢と蘭学」等。
- 1998(平成 10) 飛田良文^{ひだ}他編『明治期国語辞書大系』第 1 期第 2 回配本の 1 巻として『言海』が複製。宮城県図書館開館記念事業「みやぎゆかりの先哲たち」(高田宏「大槻文彦をめぐって」5.23 ほか)。
- 2000(平成 12) 「20 世紀デザイン切手」シリーズ第 7 集に「『大言海』大槻文彦」。一関市博物館で企画展「はるかなるヨーロッパ～蘭学者大槻玄沢の世界認識～」。
- 2001(平成 13) 仙台市博物館蔵「慶長遣欧使節関係資料」47 点が国宝に(2013 年、うち 3 点がユネスコ記憶遺産(世界の記憶)に)。
- 2002(平成 14) 『復軒雑纂 1 国語学・国語国字問題編』刊行(3 分冊の予定だが、2 以降未刊)。
- 2003(平成 15) 宮城県図書館蔵の『言海』自筆稿本(32 冊)、『北海道風土記』稿本(同草稿 6 冊、自筆書き込みの『琉球新誌』『小笠原島新誌』を含めて)、伊達家旧蔵『生計纂要』(玄沢ら訳『厚生新編』の初稿)等が宮城県有形文化財に指定され、「宮城の至宝展」。
- 2004(平成 16) ちくま学芸文庫から『言海』縮刷版(1904)の複製が刊行。一関市博物館で企画展「大槻磐溪 ～東北を動かした右文左武の人～」。
- 2005(平成 17) 伊達家旧蔵・宮城県図書館蔵玄沢ら編『環海異聞』写本、玄沢『金城秘韞』写本、磐溪編『英文翻訳彼理日本紀行』稿本が斎藤秀三郎『熟語本位英和大辞典』自筆原稿とともに宮城県指定有形文化財に。
- 2007(平成 19) 一関市博物館で「GENTAKU ～近代科学の扉を開いた人～」展。
- 2011(平成 23) 岩手県立図書館で「大槻文彦と辞書の世界 『言海』刊行 120 周年」展。一関市博物館で『言海』誕生 120 周年 ことばの海 国語学者大槻文彦の足跡」展。

- 2013(平成 25) 大槻家資料 5100 点が一関市博物館に寄贈、「大槻家旧蔵板木」142 点(文彦『伊香保誌』、『小笠原島新誌』、玄沢『蘭学階梯』、『瘍医新書』、磐溪『合衆国小誌』等)が岩手県指定有形文化財に(うち 4048 点が 2023 年国指定重要文化財)。
- 2014(平成 26) 一関市立一関図書館が開館し「言海コーナー」設置、「大槻文彦先生の像」を市役所から移設。一関市博物館で「板木と和本の世界」展(「大槻家旧蔵板木」など)。
- 2022(令和 4) 一関市博物館で「幕末明治を支えた大槻三代 玄沢・磐溪・文彦」展。
- 2023(令和 5) 一関市博物館で「重要文化財指定記念特別展 大槻三代ファミリーヒストリー」。

年代不詳

- ・ 1882(明治15)? 「石川桜所伝記資料」(自筆本) (早稲田大学図書館洋学文庫蔵)
- ・ 1901(明治 34)以降 西磐井郡巖美村(現一関市)の「美騮^{びりゅう}偉跡」碑を撰文。
- ・ 1902(明治 35)以降 正則予備学校(斎藤秀三郎の正則英語学校に併設)で国語を担当(?)。
- ・ 1912(大正元)以降 『伊達騒動談』(『石巻時事新報』88 号付録)
- ・ 不詳 「宮城県庁構内なる旧蹟二三件」(自筆本) (東京大学明治新聞雑誌文庫吉野文庫蔵)
- ・ 不詳 森亮三郎『黄金山神社考拾遺』を閲。(『宮城県史蹟名勝天然記念物調』p. 8)